

海軍

海軍水測兵の戦争体験記

兵庫県 衣川 富雄

私は昭和十八年八月十日、大竹海兵団に入団しました。当時私の家族は、祖母（七十八歳）、父、継母、第二人と妹一人の七人家族で、農業をしております。祖母は炊事を手伝う程度でしたが私の出征中に亡くなりました。父は四十五歳で要塞重砲兵経験者です。母が亡くなったので後添いの継母と二人で農業をいたしました。上の弟は在宅でしたが私のあとを追うように志願で海軍に、下の弟は住友の軍需工場に勤めていましたが、これも間もなく海軍に行きました。妹は小学

生でした。

男の子三人揃って海軍だったのですが、三人共、終戦間もなく帰りました。上の弟は日露戦争当時の戦艦「八雲」、下の弟は海防艇に乗って青島付近の支那海にいたそうです。

私は昭和十七年夏の徴兵検査を受け現役入団ですが、入団日時が丸々一年後の昭和十八年八月十日になっているものだから一緒に検査を受けた者は十八年正月までに、どんどん入隊して行くのを見て、じりじりしていました。

呉鎮守府の管轄が中国、近畿両地方の南部、東海の一部となっていて私には呉鎮の大竹海兵団によるやうに入団できました。早速、兵種の決定で、「電信」「信号」「水測」の三つの中から一つ選べといわれ、訳が

判らぬままに「水測」を希望しました。直ちに神奈川県三浦半島久里浜にある海軍機雷学校へ向けて汽車で出発しました。ここで三カ月間の新兵教育が始まりました。

内務班は陸軍と異なって、新兵だけ三十人で一個班を作り二曹が班長で教員と呼ばれていました。新兵だけの内務班ですから、古い兵隊に対する気遣いは要らない代わりに、教員に「たるんどる!」「やる気がない!」と、杉や松では折れるので、桜や樺の棒でバン尻を叩かれ徹底的に絞られました。

六つの班で一個分隊となり大尉が分隊長になりました。初年兵は食事だけが唯一の楽しみなのに食料は少量で副食も粗末で、当時の内地の食料事情が海軍にも反映されていました。飯は米麦混合でしたが何しろ少ないものですから、入団時六十キロあった体重が見る減って五十一キロになってしまいました。

家にいる時は農家だけに米だけは腹一杯食べていましたから、腹が減って仕方なく、訓練よりも辛く感じました。

教練は当時の戦局を反映して、即戦力の養成が急がれ、苛烈を極めました。幅が四十センチの急な階段の昇降も全速力でやらされました。カッター訓練は六人ずつ二列になって、太くて長いオールにすがり付くようにして前後に漕ぐうちに疲れて思うように操れず、教員に気合を入れられる始末です。

ご存知の海軍独特の精神注入棒を使つての尻叩きは全員揃って喰らいました。私的制裁はありませんでしたから、現在思い出しても恨みに思うことはありません。叩くには叩くだけの理由があるんだと納得できましたから痛かったが我慢できました。軍艦に乗れば狭い艦内で機敏な動作が要求されたから、厳しい訓練は当然でした。五十年の歳月で当時の記憶も薄れていますが、入団当時の志願兵の若い裸体が青空の下ピチピチと体操している様子は案外ハッキリと憶えています。

慌ただしい生活でアツと言う間に三カ月の新兵教育が終わり、引き続き水測練習生の教育が始まりました。

「水測」とは、軍艦を造る時に外板の底部に近い所に水中聴音機（径二十センチくらい）を片側八個宛計十六個を造り付けてあるのですが、下士二人、兵四人計六人が一組となり、何組かが交代で二十四時間体制で敵艦のエンジンの水中音波を耳で聞き分けながら敵艦の方向、距離、速度を測定するのが任務です。小さなハンドルを回して左右を聞き分け、ブラウン管に光が横に走って伸びるか止まるかを機械が計算して、距離が判る仕組みになっています。

全く経験のない素人が教官の弾くピアノを聞いたり、録音されたターピンの音やモーターの音を聞かされ音感教育を叩き込まれました。

一日も早く技術を磨いて立派な水測兵として役立つたいと頑張りましたが、運悪く大腿部にできものが出来て、一カ月半も医務室通いになり、成績がドーンと落ち残念でした。

六カ月の教育が終わる頃は乗り組む艦が決まっています、一週間後に入港するのを待って「十七号掃海艇」に乗り組むことになりました。この頃は艦が少なく

教育が終わっても艦が足りない状態でした。幸い私が乗艦できたのも、丁度私が教官係についていたのが幸いしたようです。教育を終えた者は皆が艦に乗りたがっていました。

昭和十九年五月に六カ月間の水測練習生の教育が終わり、呉に帰り「十七号掃海艇」に乗り組みました。千トン未満で百五十人の乗員です。艦長は少佐でした。この艇は石炭と油を混合して焚く混焼型の古い形式の掃海艇でしたが鋼鉄艦でした。ちなみに最近、湾岸戦争で日本から派遣された海上自衛隊の掃海艇は木造艦だったそうです。

「十七号」は厚さ二センチの薄い外板でした。石炭の積み込みは上陸を前提としていましたので、上陸を夢見ながらの作業ですが、粉炭を石炭で固めた豆炭状のものを積み込むものですから、白い作業服が真っ黒になり、洗濯するのに真水が少なくなかなか白くならず、特に上の人の物を洗うのに苦労しました。周りの海水は塩分のため仮に洗っても乾燥が駄目ですから使えません。

幸い乗れた掃海艇ですが、本職の掃海用具は一切ありません。輸送船団の護衛役になったのです。口径十二センチの大砲が前後部に各一門、二十五ミリ連装機銃が三基、それにドラム罐のような爆雷の投下装置と発射装置二門が武器です。

船団護衛となると先ず心配なのは潜水艦と飛行機ですが、昭和十九年五月頃は未だ空襲は無かったようで、敵の潜水艦を少しでも早く発見して攻撃することが肝要でした。何千人もの兵隊や貴重な武器や物資を護り抜く最前線が水測班の活動にあることを考えると、責任の重さに潰されるようでした。潜航中の敵潜はバッテリーによるモーター運転ですから、モーター音は微弱で捕捉が困難でした。

昭和十九年五月から昭和二十年三月までの十一月か月間掃海艇に乗って船団護衛の任務に就いた訳ですが、当直で水測班勤務中は任務の重大さに身をさいなまれる思いでした。

船団護衛は輸送船五、六隻を海防艦、掃海艇合わせて約五隻で守り、門司出港、台湾に向け大陸の沿岸伝

いに高雄に入り、それから五、六日間でマニラ、ボルネオ、シンガポールに無事到着できた時は「やられずにすんだ」とほっとしたものです。

そのうち戦況が悪くなり、輸送船がやられるようになりました。護衛する方にも被害が出るようになってきました。

敵はちょうどアフリカのサバンナで草食獣を狙う猛獣のようなもので、船団を見つけると追跡していて夕暮れか夜明けを待って攻撃してくるのです。その頃に水測の当直に当たると緊張の連続でした。

護衛艦が攻撃されることもありましたが、敵さんになれば番犬を先にやつつけければ、あとに残るのは羊ばかりですから。「十七号」も浮上中の敵潜との戦闘訓練を常にやっていました。ある朝方、演習中に突然敵潜が浮上して砲撃を加えてきました。

こちらも大砲、機銃で応戦しましたが潜航逃走しました。この犠牲者六人を出しました。また遭難船の救助中は停船しなければなりませんから、この時が一番危ないのですが、幸いやられませんでした。夜間や

られた船の救助は夜明けにならねばできませんから悲惨でした。コルクの救命胴衣をつけた兵が一つの浮遊物に十五人もつかまって救助を夜通し待っているのです。

舷側からロープを垂らして救い上げるのですが、途中で力尽きてロープを離して流される者、また少しでも早く助かりたいのか泳ぎ出して途中で波に吞まれてしまう者等、救命胴衣を着けたまま、白くふくれた死体が艇側を次から次へと流れて行きました。

船団にどんな部隊が乗っていたのか皆目判りませんが、華々しく戦闘で戦死するなら兵の本望でしょうが、途中で水死した無念の屍体を数多く見ているうちに不感症になり、大してかわいそうとも思わなく見過ごしてきたことを、今振り返ってみると、あれが戦争なんだと痛感します。あの時は一時間後は自分があのような姿になるかもしれないのですから。

あとになって、「ああ、あの兵隊にも家族があるのになあ！ 水測でなぜ探知できなかったのか」と悔やむばかりです。護衛任務に従事した期間は約十カ月間

ですが、回数はその多くありませんが悔いを残すことばかりでした。私の海軍生活は後悔の連続でした。

バンシー海峡ではよくやられたので、行先を変更して近くの港に避難し上陸することもありました。無事目的地に到着して人員、武器を揚陸させた時は「ホッ」とします。帰りはボーキサイトや油やゴムなどの戦時物資を積んで内地まで輸送する船の護衛が私共の任務です。

小さな艇の生活は家族的で食事も割と良かったものです。香港では現地人が卵を売りに来ました。カゴを吊り上げて卵を受け取り、代金と一緒に酒やビールの空き瓶を一杯つめて返してやると大喜びしました。また上陸地での小さな買物も束の間の楽しみでした。今、当時を振り返ってみると不思議なことがあるのです。私等の掃海艇が通ったあとを戦況が追いかけていることです。

昭和十九年十月二十七日のフィリピン沖海戦や、昭和二十年三月二十七日の沖繩島上陸戦の直前に付近の海面を「十七号」が通過しているのです。

昭和二十年三月末に海南島沖で敵機コンソリデーテッドに爆撃され外板にあき海水が浸水したので、応急修理で防水板（タタミのようなもの）を外から穴に当て、海水の圧力で穴を塞いで海南島まで僚船に曳航され修理することになりました。

ここで修理中の「十七号掃海艇」から私は下船を命じられ駆逐艦「栖」に移りました。ですから「十七号」最後の航海で沖繩を通過した直後に米軍上陸となったのでした。「十七号掃海艇」がその後、沈没したのか無事だったのか消息は不明です。

次に乗った「栖」は一等駆逐艦で排水量一二六二トン、昭和十九年竣工、艦長は海兵出身の二十七歳の若い少佐でした。乗って間もなくの昭和二十年七月、不幸にも関門海峡で米軍の投下した機雷に触れ艦体の後部が折れるという事故に遭い、犠牲者は幸い無しでしたが、それからは修理中の艦内に留まって生活していました。する事がありませんので一回帰郷を許されました。また近くの巖流島に上陸したり、山へ行っただけを取って艦体を掩う擬装網を編んだりしました。

八月六日に広島に原爆が落とされた時は、広島出身の兵達は特別に休暇をもらって一時帰郷しましたが、間もなく家は焼け家族は全滅だと肩を落として帰ってきた兵もありました。

終戦の玉音放送は艦内で聞きました。眼に浮かんだのは輸送船に乗っていた兵隊の姿でした。護衛艦を信頼して乗っていただろうに信頼に応えられなかった申し訳なきがこみ上げてきました。

特にあらたまった復員の儀式もなく「衣囊」に軍服作業衣を詰めこんで帰りました。兵の中には「艦が動くようになったら、これから海賊になるんじゃない」と意気さかんな者もいました。下関の街は空襲の被害が少なかったせいも静かでした。下関から山陰線では我が家に帰りました。留守宅は農家ですから食うには困りませんでした。親父は農作業が肉体的に大変だったようで私の復員を喜んで迎えてくれました。弟二人も程なく復員してきました。

五十年前を思うと教育期間中の教育の力は偉大なものだと痛感します。当時の社会情勢もありましたが……。

鎌倉への行軍、冬の兵舎を何回も駆け足で走らされ遅れると「もう一回」と走らされたこと。整列ビンタでも上曹ビンタは順番に下級ビンタに移り、何回もビンタをはられたこと等々、当時の辛さは今では懐かしくなっています。現在の若い者にもあの団体生活は一度体験させたらよいと思います。

親の反対を押し切り海軍志願

山形県 江目 育藏

昭和三年三月二十四日、山形県河北町溝延の農家の長男として生まれましたが、昭和十九年ともなれば男は皆兵隊としていくという時代でありました。弟三人、妹一人の家族だったので、私は海軍に志願をしたいと思いつつ両親を説得したのですが、母は反対していました。昭和十九年五月二十日、十九年前期の水兵として舞鶴海兵団へ志願兵として入団しました。兵籍番号は「舞志水三〇四五一番」です。大東亜戦争の末期であ

るなど知る由もなかった私ですが、父は男として止むを得ないと思っていたかも知れませんが、母は私が入隊して一週間ぐらいの間、食事が喉に通らなかつたと言っていたそうであります。今思えば「親の心子知らず」であったのですが、当時としては日本男児としては止むを得ない心境でありました。

海兵団の教育は厳しいものでありましたが、どの海軍出身者も言う通り、今の人には想像もつかぬ三カ月でありました。教育終了後は教班長の指示で「鬼の館山」と言われた千葉県館山砲術学校へ入校しました。対空砲班第十期生として高角砲の教育を受けたのですが、銃砲と名の付くものは全部撃ちました。

海兵団では一般教育、その後は私のように学校へ入る者と実施部隊に行く者とに分かれるのであります。一個班三十人で十二個班を一個分隊とするので、陸軍の分隊とは違い、人数は一個中隊ぐらいです。これが七個分隊で教育を受けるのですから、海兵団の初年兵は約二千五百人ぐらいだったと思います。

私は幸いというか、教班長係を命ぜられていたので